OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グローバル日本研究クラスターについて
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グローバル日本研究クラスターについて

宇野田 尚哉

ここに発行するのは，大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター（以下，本クラスター）の報告書の第 1 集である。ここではまず，本クラスターとその活動について紹介したうえで，本報告書について簡単に説明しておくこととしたい。

１．グローバル日本研究クラスターとは？

本クラスターは，大阪大学大学院文学研究科内に 2014 年度に設けられた「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター（Global Linkage Clusters for Humanities）」（略称「人文学クラスター（GLinCH）」）の 1 つとして，同年度に設けられた。

この「人文学クラスター」は，従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として，⑴国内外の大学，研究教育機関，学術芸術機関，自治体等と共同して，分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと，⑵個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに，研究科内に組織化することによって可視化し，個の力を組織の力に高めること，などを目的としている（http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/research/activities/projects/ cluster_h26）。

この「人文学クラスター」の 1 つとして設けられた本クラスターは，既存の枠組を横断するプロジェクト型の研究組織として，海外の日本研究者と緊密なネットワークを構築しつつ研究教育にあたることで，①本研究科の日本研究のグローバル化と，②本研究科の日本研究領域の大学院教育のグローバル化を図るとともに，③本研究科が日本研究領域の世界的拠点として認知されることを目指して，活動している。

第 1 期（2014～2016 年度）の構成員は，入江幸男，浜渦辰二，舟場保之，三谷研爾，合山林太郎，宇野田尚哉，第 2 期（2017～2018 年度）の構成員は，入江・浜渦・三谷・宇野田のほか，浅見洋二，輪島裕介，山本嘉孝，ヤスコ・ハッサル・コバヤシ，モハンマド・モインウッディンで，代表は，2014 年度は入江，2015 年度以降は宇野田がつとめている。構成員にドイツ研究者が多いのは，ハイデルベルク大学の日本学研究所との交流を担っていた教員がその実績を踏まえて本クラスターを立ち上げたという経緯があるからであり，そこに中堅・若手の日本研究者が加わることで現在の人員構成となった。

２．本クラスターの活動とその周辺

以上，目的や組織について略述したが，掲げている目的の大きさに比して組織が脆弱で実際の活動が限定的である点は否めない。現状では，各構成員それぞれの課題や人脈を尊重しながら本クラスターを結節点とした国際的ネットワークの構築に注力するという段階にとどまっていると言わざるをえない。

そのため，本クラスターの活動全体としてどのような研究教育上の成果が見込まれるのかを端的に説明するのは今の段階では難しいが，ハイデルベルク大学の日本学研究所との交流から始まった本クラスターの活動が，研究内容の面でも連携相手の面でも多角化していることは，後掲の「グローバル日本研究クラスター活動記録」から了解していただけるだろう。第 2 期の最終年度となる 2018 年度には，第 1 期・第 2 期の実績を踏まえて，中期的な展望をより明確にせねばならないと考えているところである。

ところで，本クラスターの周辺では，活動を開始した 2014 年度の時点では想定していなかったことが，さまざまなかたちで起こっている。身近なところでは，2017 年度から，文学研究科を実施部局として，大学院高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ（Global Japanese Studies）」（http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/fukupuro_GJS）が開講された。日本研究の最新の成果を分野横断的に学ぶとともに，みずからの日本研究の成果を英語で発信する能力を高めることをねらいとするこの教育プログラムは，研究プロジェクトとしての本クラスターと，相補的な関係にあるといえよう。

さらに，学外では，国際日本文化研究センターが代表幹事機関となるかたちで，2017 年 9 月に，「「国際日本研究」コンソーシアム」（Consortium for Global Japanese Studies）が発足し，大阪大学大学院文学研究科も機関として参加することになった。「国際日本研究」「グローバル日本研究」を掲げる高等教育機関が急増し，そのコンソーシアムが結成されるに至っているのである。

ただし，「国際日本研究」「グローバル日本研究」なるものが実質をともなってすでに確立されているというわけではもちろんないだろう。むしろ，とりあえず掲げたこの看板にどのような実質を充填していくのかを各機関が模索しているというのが，現状ではないだろうか。本クラスターが直面しているのも，まさにそのような課題にほかならない。

３．本報告書について

本報告書は，本来であれば第 1 期の最終年度（2016 年度）に発行しておくべきものであったのだが，前述の通りなかなかネットワークを構築する段階から研究成果を展望する段階に移行することができないでおり，先送りとなっていた。現状でもまとまったかたちで

学術的成果を提示できるわけではなく，忸怩たるものがあるが，いくかの理由により今年度はともかくも第 1 集を中間報告として発行することにした。

発行を決めた理由の 1 つめは，いったんこれまでの活動の履歴を確認して，ネットワークを構築する段階から研究成果を展望する段階へ移行する契機としたいと考えたことである。この点と関わっては，後掲の「グローバル日本研究クラスターの活動記録」を参照されたい。あらためてこのように整理してみると，いかに多くの方々のご協力によって本クラスターの活動が成り立ってきたかが実感される。この場を借りて，これまでにご協力を賜った方々にあらためてお礼を申し上げたい。

発行を決めた理由の 2 つめは，本クラスターの活動のなかでのやりとりをきっかけとして韓国で開催された国際ワークショップの記録を残しておきたいという要望が強かったことである（特集 1 参照）。このワークショップ自体が，問題の所在を示すという性格のものであり，まとまったかたちで学術的成果を示すものとはなっていないが，新たなネットワークが新たな問題構成を生んでいく現場を提示するという意味では示唆に富むのではないかと考え，掲載することにした。本クラスターは，新たなネットワークの構築を通じて，萌芽的な研究課題を数多く抱えるに至っており，どれをどう発展させていくかが今後検討すべき課題となっている。

発行を決めた理由の 3 つめは，2017 年 7 月 22 日に開催したワークショップのフォローアップとして，大学院生の英文論考を掲載する媒体が必要であると考えたことである。このワークショップの詳細についてはオーガナイザーの山本嘉孝が特集 2 の冒頭に寄せている文章を参照されたいが，このワークショップでは日本研究に従事している大学院生がみずからの研究の成果を英語で口頭発表した。その口頭発表を英文論考とする機会を提供することを意図したのが本報告書の特集 2 である。本クラスターは基本的には研究組織であるが，並行して大学院高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」が開講されたこともあり，大学院生にこのような機会を提供することで積極的に教育的機能も引き受けようと考えた。

2 つの特集の間には，書評を 1 編掲載した。本クラスターの活動にも協力してくださっているハイデルベルク大学のティル・クナウトさんがドイツ語で刊行なさった書物の書評である。ドイツ語となると，日本の日本研究者にはなかなかその内容にアクセスできないので，中国語・英語・ドイツ語・日本語が堪能な大学院生の周雨霏さんに，あえて日本語で執筆していただいた。研究交流の一助になれば幸いである。